

ミシェル・ウエルベックの小説における死を否定する試みとその失敗

西村真悟（京都大学）

はじめに

ミシェル・ウエルベックの小説を特徴づけるものとは何だろうか。このように問われた人の多くはおそらく、この作家の現代社会に対する悲観的なまなざしを思い浮かべるだろう。新自由主義的な競争原理の私的領域への拡大、個人主義による人々のつながりの希薄化、それらによって愛が被る危機などの現代社会の問題点が、彼の小説では頻繁に主題化されてきたからだ。一方で、ウエルベックの小説にはただ悲惨な現状だけが描かれているわけではなく、そこにはその現状に対する抵抗の試みもまた記されている。その抵抗の手段として選ばれるものは、クローン技術からイスラム教による支配まで多岐にわたる。しかし、描かれる抵抗の手段が多岐にわたるというこの事実はウエルベックの小説が持つ悲観主義という特徴を強めるものであるとサビヌ・ファン・ヴェースマルは主張する。ウエルベックについての最初の学術論集の編者であるヴェースマルは、この作家に関する研究を始めた当初から、その悲観主義を論じてきた。ウエルベックの小説に描かれる個人主義やそれによって現代人が抱く孤独や空虚感に注目するヴェースマルは、「ウエルベックは理想も光も失われ、人々がそこから疎外されていると感じる世界を描いている。幸福は不可能であることが明らかになり、空虚さを埋めようとする試みは毎回失敗することを運命づけられている。彼の小説の主人公たちは皆、同じ悲惨に、同じエゴイズムに、同じ嘘に、同じ幻想に直面している¹」と指摘する。彼女によれば、ウエルベックの小説において個人主義による孤独や空虚感に抗うさまざまな試みが何度も描かれているということは、それらがすべて失敗に終わっているということ、すなわち有効な手段を提示できていないということを意味しており、そのことが逆に現状から逃れる術はないという悲観主義を強調している。しかし、本当にそれらの失敗はウエルベックの悲観主義を強めるだけなのだろうか。そもそも、ウエルベックが抵抗の試みを描くのは、現状をさらに悲観するためなのだろうか。

この疑問に答えるために、ウエルベックの小説に描かれた抵抗の試みに着目している別の研究を参照したい。ルイス・ベティはウエルベックの小説を宗教というテーマから読むことで、ウエルベックは伝統的宗教の衰退と唯物論の勃興が引き起こす問題を描いているということを示し、『素粒子』（1998）から『服従』（2015）までにおいて、その問題に対する解決策の模索が展開されていると主張している。ベティはまず、ウエルベックが問題視している唯物論は、とくに物理主義と呼ばれるものであると指摘する。この物理主義によれば、世界そして人間存在までもが物質によってのみ構成され

¹ « Houellebecq décrit un monde privé d'idéaux et de lumière où l'homme se sent étranger ; le bonheur se révèle impossible et les tentatives de meubler le vide sont destinées à échouer à chaque fois. Ses héros se heurtent tous aux mêmes misères, aux mêmes égoïsmes, aux mêmes mensonges, aux mêmes illusions. » Sabine van Wesemael, « L'ère du vide », *RiLUnE*, vol. 1, 2005, p. 94. ヴェースマルは『セロトニン』（2019）に関する論文においても同様の主張を行なっている。Sabine van Wesemael, « Sérotonine de Michel Houellebecq : prédiction du destin tragique de la civilisation occidentale », *RELIEF - Revue électronique de littérature française*, Vol. 13, n° 1, juillet 2019, pp. 54-66.

ており、したがって精神や魂、神といった非物質的な実体はまったく存在しない。つまり、「脳が死ぬとき、精神もまた死ぬ²」。したがって、たとえば現世で死んだのちに天国で生きるといような、死後の生、つまり魂の不死という夢は排除される。ベティによれば、このような死後の生の否定こそがウエルベックにとって唯物論が引き起こす最大の問題である。なぜならウエルベックによれば、宗教の第一の役割かつ成立の第一条件は、何らかの形で不死を保証することであるからだ。したがって、「[伝統的な宗教すなわちカトリックの] 衰退は不可逆的である³」と考えるこの作家は、自身の小説において「ふたたび宗教を可能にする⁴」ために肉体の不死を確立しようとするのだ。このように考えるベティは、まず『素粒子』と『ある島の可能性』(2005)においては、肉体の不死を可能にするクローン技術によってユートピアを構築しようとする「テクノ・ユートピア主義 techno-utopianism⁵」にもとづいて、かつての宗教の代替を探索する試みが描かれているとする。しかし、『ある島の可能性』はこの主義にもとづくユートピアの失敗を描いた小説であり、「唯物論がおそらく根絶してしまった宗教的世界観の代替を、フィクションにおいてではあるが、提示するというウエルベックの試みが終わったことを示している⁶」。しかしそれは、宗教的世界観の代替を提示するために科学技術に可能性を見出す試みが終わったということであり、『地図と領土』(2010)においては、科学技術ではなく農業と観光産業にユートピアの可能性が見出されているとベティは述べる。加えて、ミシェル・ウエルベックという登場人物のカトリックへの改宗が描かれることで、カトリックの再興がほのめかされてもいる。ベティによれば、『ある島の可能性』と『地図と領土』のあいだには断絶があり、『地図と領土』は『服従』への橋渡しになっている。なぜなら『服従』では、それまでの「テクノ・ユートピア主義」とは異なり、より現実的な手段、すなわちイスラム教という既存の宗教による支配を受け入れる可能性が描かれているからだ⁷。このようにベティは、ウエルベックの小説に描かれる抵抗の試みを失敗したものとして一括りにして考えるヴェースマルとは異なり、ウエルベックの小説を伝統的な宗教的世界観の代替を探る試みの連続であると捉え、『服従』でイスラム教の支配が描かれるまでの各小説における抵抗の変遷を連続的なものとして抽出している。つまりベティは、ウエルベックによる試みの失敗を次の試みへの糧として肯定的に捉えているのだ。

このようにウエルベックの小説を、そこに記された抵抗の試みの変遷から捉える視点は評価できるものの、ベティの議論には疑問が残る。ベティははじめ、ウエルベックの小説において伝統的な宗教の代替が探求されるのは、唯物論的世界観がそれまで伝統的な宗教が保証していた精神的な不死を否定してしまったからだと主張している。それにもかかわらず、『地図と領土』以降において不死に対する

² « as the brain dies, so does the mind ». Louis Betty, *Without God: Michel Houellebecq and Materialist Horror*, Pennsylvania, Penn State University Press, 2016, p. 22.

³ « the decline [of religion] is irreversible » *Ibid.*, p. 31.

⁴ « rend[r]e, à nouveau, une religion possible » Michel Houellebecq, « Préliminaires au positivisme », *Houellebecq 2001-2010*, Paris, Flammarion, 2016, p. 1060. 『ウエルベック発言集』西山雄二他訳、白水社、2022年、192頁。

⁵ Louis Betty, *Without God*, op. cit., p. 103.

⁶ « signaling a point of closure in Houellebecq's attempts, if only in fiction, to propose an alternative to the religious worldviews that materialism has supposedly eradicated » *Ibid.*, p. 99.

⁷ *Ibid.*, p. 103.

関心がウエルベックの小説において表立って見られなくなる⁸のは、ウエルベックのユートピア観が空想科学的なものから現実的なものへと変化したからだとしている。つまり、ベティの議論において、伝統的な宗教的世界観に代わる新しい世界観の提示は死後の生の否定に対する抵抗の手段として当初は考えられていた一方で、最終的には新しい世界観の提示が目的そのものになってしまっているという手段と目的の逆転が起こっており、その結果、そもそもなぜウエルベックが唯物論的世界観に抵抗しようとしているのが最終的に曖昧になってしまっている。さらに、それが原因となって、『ある島の可能性』と『地図と領土』とのあいだの断絶の理由、つまり、『地図と領土』以降の長編小説における、方向性の転換の理由もまた不明なままに留まっている。

したがって、問うべきは、抵抗の理由、すなわちなぜウエルベックの小説において死後の生を否定する唯物論的世界観が抵抗すべき現代社会の問題として描かれているのか、加えて、その問題に対してウエルベックの小説ではどのような抵抗手段が描かれているのかである。これらの問いに答えることで、『ある島の可能性』と『地図と領土』のあいだにベティが指摘するような変化が見られる理由を明らかにすることができるだろう。また、ウエルベックの小説に描かれた抵抗の試みを再評価することを通じて、ヴェースマルの言うように試みの失敗がただ悲観主義を強めるだけなのか否かを明らかにすることができるだろう。そのために、我々はまず第一節において『素粒子』や『ある島の可能性』において見られる唯物論的世界観に対するベティの分析を下敷きにしながら、その世界観がどのような問題をどのように引き起こすのかを分析する。これにより、その問題が愛というテーマと関連していることが浮かびあがり、その結果、唯物論的世界観がなぜウエルベックにとって問題となるのかが明らかになるだろう。続いて第二節から第四節において、『素粒子』、『プラットフォーム』、『ある島の可能性』における、第一節で明らかにした問題に対して示される抵抗の手段を出版年順に分析していくことで、その一貫性と変遷を捉え直す。そしてこれらの考察をもとにして、『ある島の可能性』と『地図と領土』とのあいだに見られる変化の理由についての仮説を提示することを目指す。

1. 愛と死の対立

ベティが指摘する通り、ウエルベックの小説において唯物論が引き起こす最大の問題は、死後の生の否定であると言えるだろう。しかしより正確に述べるならば、問題となっているのは死後の生の否定によって死の性質が変わったことである。

⁸ 「ウエルベックのそれまでの作品の多くにおいてユートピア世界を形作った不死への熱中は消え去った」
 « Gone is the preoccupation with immortality that formed the utopian firmament of much of Houellebecq's previous work »
Ibid., p. 101. もちろん、『地図と領土』以降の小説においても、死のテーマを確認することができる。しかし、そこで問題となるのは、唯物論によって死後の生が否定されたことや、精神的なものであれ肉体的なものであれ、不死を探究することではない。そうではなくて、たとえば『地図と領土』において主人公ジェドの父親が身体の高齢を苦にして安楽死を選ぶことに示されるような、現在の苦痛から逃れるために自ら死を選ぶことなどが問題視されている。たしかに、カトリックにおいて重罪である自殺が行われるという状況は、死後の生が否定されたことと関わるものだろう。しかし、『地図と領土』において焦点が当てられるのは、身体の高齢と人間の尊厳との関連といった問題であり、不死を（ふたたび）獲得することで死そのものを否定することではない。

『素粒子』の語り手は、キリスト教的世界観の衰退と唯物論的世界観の勃興によって、現代西洋社会に属する個人にとって自分自身の死に対する意識が「一種のバックグラウンド・ノイズ [une sorte de bruit de fond]⁹」のようにつねに自身に付きまとうものとなったと述べる。キリスト教が支配的だったころ、死は地上の生の終わりと同時に天上の生の始まりを意味していたが、キリスト教の衰退によって、死は地上の生の終わりだけを意味するようになる。すなわち死はひとりの個人の生の絶対的な終わりを意味するようになった。ゆえに、『素粒子』の語り手が「現代の意識の根本原理はかならず死ぬという条件にもはや適応していない¹⁰」と述べるように、死は現代人にとって耐えがたいものとなる。そして、この耐えがたき死に対する意識が現代人につねに付きまとうのは、自らの死が人生の期限を表すようにもなったからである。この観点からすれば、年齢は単に今まで過ごした時間を表すだけでなく、残された時間を知らせるものでもある。この点で死と老いは結びつく。デイヴィッド・ヴェラはウエルベックの小説における死の意識を、「デス・アウェアネス death awareness」という新しい概念を作り出すことで説明している。「デス・アウェアネスは、最終地点や究極の目的地として近づいてくる自らの死に対する意識ではない。[...] それは自身の未来における死を意識することではなく、むしろ今まさにこの瞬間自分が死にかけているということを意識することである¹¹」。すなわち、自らの意思と関係なく自分が死に向かって進んでいるという意識である。加えて、彼はこの意識と老いの恐怖を結びつける。

自分が老いている最中だという事実を思い出すことで、この奇妙な意識が衝撃を与えることになる。ウエルベックの小説に登場する人物の多くが、自らが老いている最中であり、したがって自らの終わりに向かって直進しているという現実気がつくとき、この意識が姿を表す。肉体はこのような事実を思い出させるものとして機能することが多い。¹²

このようにして、自身の生の期限への前進を示す年齢というものは恐怖を引き起こす。「いかなる時代、いかなる文明においても、人々がこれほど長いあいだ絶えず自分の年齢について考えたことはいまだかつてなかった¹³」。人生の期限としての自分自身の死に対する意識は絶えず現代西洋人に取りつき、死ぬまで恐怖を引き起こしつづける。

⁹ Michel Houellebecq, *Houellebecq 1991-2000*, Paris, Flammarion, p. 624. 『素粒子』野崎歓訳、筑摩書房、2006年、114頁。強調原文。以下、同書から同作を引用する場合 PE と略記し、原書／日本語訳の頁数を示す。

¹⁰ « Les éléments de la conscience contemporaine ne sont plus adaptés à notre condition mortelle » PE 827/338.

¹¹ « Death awareness does not signify an awareness of my oncoming death as a final and absolute destination. [...] It is not the consciousness of my future death but rather the consciousness of me dying right now, this instant. » David Vella, « The Houellebecq Cure: All Malady Will End in the Neohuman », *Word and Text — A Journal of Literary Studies and Linguistics*, Vol. 4, no. 1, 2014, p. 140.

¹² « To remember the fact that you are ageing can often lead to the shock of this peculiar awareness. It reveals itself to many of Houellebecq's characters when they awake to the actuality that they are getting older and that they are therefore advancing head-on towards their expiration. The body can frequently serve as a reminder of this fact. » *Ibid.*, p. 140.

¹³ « Jamais, à aucune époque et dans aucune civilisation, on n'a pensé aussi longuement et aussi constamment à son âge » PE 827/338.

このように一個人の生の絶対的な終わり、そして人生の期限となった死は、ウエルベックの小説において愛の障害となっている。というのも、自分自身の死に対する意識は苦しみや恐怖をもたらすだけでなく個人主義を生み出し、愛を不可能にしてしまうからだ。『素粒子』において異父兄弟のブリュノと議論するなかで、ミシェルはオルダス・ハクスレーの楽観主義を批判する。

唯物主義と近代科学を生み出した形而上学的変動は、合理主義と個人主義というふたつの大きな結果をもたらした。ハクスレーの誤りは、これらふたつの結果の力関係を見誤ったことだ。特に、死の意識が強まることによって個人主義が高まるということを過小評価したことだ。個人主義からは自由や自己意識、そして他人に差をつけ、優位に立ちたいという欲求が生じる。¹⁴

ここにおいてもまた唯物論が原因となって、死の意識が強まるとされている。この強化によって個人主義が生まれ、その個人主義が「他人に差をつけ、優位に立ちたいという欲求」、すなわち他者よりも抜きん出たいという欲求を生み出し、それによって個人間のヒエラルキーが生じる。さらに『素粒子』の語り手は、このような欲求によって経済的な領域で見られる競争原理が恋愛関係や性的関係といった私的な領域に拡大したのだと説明する。

二世紀前からフランス社会が経験した容赦ない経済競争はある程度和らいだ。[...] しかし人間というものはすぐにヒエラルキーを作り出す存在であり、同類より優れていると感じたいと熱烈に望むのである。[...] 新たな戦場で、ナルシシズムにもとづく競争が開始された。¹⁵

この「ナルシシズムにもとづく競争」において競われるのは性的関係を持った数である。最終的にこの競争は愛を不可能にしてしまう。それは、敗者がパートナーを得ることができないからというだけでなく、このような競争は性的関係を愛の証ではなくトロフィーにしてしまうからでもある。数多くの性的関係を持つためには愛を築くような特定のパートナーを持つことはできない。反対に、絶えずパートナーを変えなければならない。加えて、期限としての死を意識することは、死ぬまでに最大限の利益を得たいという焦りを生む。『ある島の可能性』の主人公のひとりであるダニエルは次のように述べる。

¹⁴ « La mutation métaphysique ayant donné naissance au matérialisme et à la science moderne a eu deux grandes conséquences : le rationalisme et l'individualisme. L'erreur d'Huxley est d'avoir mal évalué le rapport de forces entre ces deux conséquences. Spécifiquement, son erreur est d'avoir sous-estimé l'augmentation de l'individualisme produite par une conscience accrue de la mort. De l'individualisme naissent la liberté, la sensation du moi, le besoin de se distinguer et d'être supérieur aux autres. » PE 719/218-219.

¹⁵ « la compétition économique féroce que connaissait la société française depuis deux siècles avait subi une certaine atténuation. [...] Mais l'être humain est prompt à établir des hiérarchies, c'est avec vivacité qu'il aspire à se sentir supérieur à ses semblables. [...] un nouveau champ s'ouvrit à la compétition narcissique. » PE 602/88-89.

愛を終わらせるのは倦怠ではない。より正確に言えば、〔愛を終わらせるような〕倦怠は焦り、いずれ死ぬことを自覚しながらも生きたいと望む肉体の焦りから生じるのだ。この肉体は、自らに与えられた期間内でいかなるチャンスも逃したくない、いかなる可能性も逃したくないと願い、有限で、衰えゆく凡庸な自分の生涯を最大限に活用したいと願うのだが、それゆえに、誰であれ愛することができない。なぜなら、他人が皆、有限で、衰えゆく凡庸な存在に見えてしまうからだ。¹⁶

このように、競争と焦りは「誰であれ愛し」はじめることを妨げる。したがって、自分自身の死に対する意識は、愛が始まることを妨げるという点で愛の障害となっている。

しかし、ウエルベックの小説において愛の障害となっている死は自分自身の死に対する意識だけではない。『素粒子』、『プラットフォーム』、『ある島の可能性』には共通して描写されているものがある。それは恋人あるいは妻の死を受け入れることができない男の姿である。まず『素粒子』において、ブリュノは恋人クリスチャーヌの死を経験する。病院で彼女の死体を見たブリュノは泣くことができない。それは彼女の死を、そして愛の終わりを受け入れることができないからだ。実際、彼にとってクリスチャーヌはもはや彼を愛することができない。これは彼にとって愛の終わりを意味する。したがって、あまりにも辛い現実から自分が切り離されているように彼は感じる。棺を埋葬用の穴に入れたあと、職員のひとりが彼に「望むならこの場で黙想し〔se recueillir sur place s'il le désirait〕¹⁷」てもいいと伝える。しかしウエルベックは黙想の場面を描かない。ブリュノは精神科病院に向かい、そこで余生を過ごすことになる。彼は黙想しない、すなわち恋人の死を受け入れることを拒む。反対に、彼は精神科病院に入院することを選ぶ。彼はもはや狂気に陥ることによってしかクリスチャーヌの死から目を背けることができない。実際、これ以後、クリスチャーヌの名が小説に登場することはない。

『プラットフォーム』の主人公兼語り手のミシェルもまた、恋人ヴァレリーの死を経験する。恋人の不在に苦痛を覚えるミシェルは精神科病院に入院する。ミシェルは「現実否認の段階〔des phases de déni du réel〕¹⁸」にあるとされる。実際、彼の理性は「ときどき〔par éclipses〕¹⁹」しか働かず、彼の狂気が恋人の死という現実から目を逸らせている。「当時はまだ、いや実際は相変わらず今も、たい

¹⁶ « Ce n'est pas la lassitude qui met fin à l'amour, ou plutôt cette lassitude naît de l'impatience, de l'impatience des corps qui se savent condamnés et qui voudraient vivre, qui voudraient, dans le laps de temps qui leur est imparti, ne laisser passer aucune chance, ne laisser échapper aucune possibilité, qui voudraient utiliser au maximum ce temps de vie limité, déclinant, médiocre qui est le leur, et qui partant ne peuvent aimer qui que ce soit car tous les autres leur paraissent limités, déclinants, médiocres. » Michel Houellebecq, *Houellebecq 2001-2010, op. cit.*, pp. 653-654. 『ある島の可能性』中村佳子訳、河出書房新社、2016年、336-337頁。以下、同書から同作を引用する場合PIと略記し、原書／日本語訳の頁数を示す。

¹⁷ PE 829/341.

¹⁸ Michel Houellebecq, *Houellebecq 2001-2010, op.cit.*, p. 339. 『プラットフォーム』中村佳子訳、河出書房新社、2015年、385頁。強調原文。以下、同書から同作を引用する場合PFと略記し、原書／日本語訳の頁数を示す。

¹⁹ PF 339/384.

ていの場合ヴァレリーは絶対に死んでいなかった²⁰」。退院したミシェルはタイのパタヤ・ビーチに向かい、そこで自らの死を待つ。『プラットフォーム』は物語の終幕近くで、このように自らの死を待つミシェルによって書かれたものであることが明かされるが、先の引用で示されているように執筆している現在においてもミシェルはまだ、現実否認の段階にいる。ブリュノと同じく彼もまた、恋人の死を、彼女のいない世界を受け入れることができず、狂気のなかで現実から目を逸らしつづける。

ではなぜ彼らは恋人の死を受け入れることができないのだろうか。その理由を理解させてくれるのは、『ある島の可能性』におけるある老夫婦の例である。ロベールとハリーはダニエルの別荘の近くに住む引退した老人である。ロベールは大学で哲学を学んだ唯物論者であり、一方でハリーはキリスト教神秘主義者のテイヤール・ド・シャルダンの愛読者である「穏健な自然主義者 [naturiste paisible]²¹」である。ダニエルが久しぶりに彼らと再会したとき、ロベールは妻を亡くしたばかりであった。

別れ際、僕はロベールの手を長く握った。彼は、なにかつぶやいたが、僕は彼がなんとつぶやいたのかまったく分からなかった。気候は穏やかなのに、ロベールは少し震えていた。悲しみに皺が刻まれ、髪も一気に白くなったこの年老いた唯物主義者に僕は胸が痛んだ。[...] それから、もしかするとハリーなら、ロベールよりももっとうまく妻の死を受け入れるかもしれないと僕は気がついた。というのも、彼なら、[ハリーの妻である] ヒルデガルドが主に仕える天使たちのあいだでハーブを奏しているところだとか、あるいは、もっと霊的な形状になって、オメガポイントの片隅にうずくまっているところだとか、そのようなことを思い浮かべることができるだろうから。しかし、ベルギー人ロベールにとっては、状況は八方塞がりなのだった。²²

ロベールは妻の死に耐えることができない。なぜなら唯物論者にとって死という出来事は永遠の別れを意味するからだ。死、それは唯物論者にとって絶対的な終わりである。ロベールの様子はブリュノやミシェルのそれを思い起こさせる。反対に、ダニエルはハリーなら妻の死に耐えられるだろうと考える。なぜならハリー夫妻は天国のような精神世界の存在を信じているからだ。この信仰によって彼らは、死者が存在しつづけていると想像し、天国から自分たちを愛してくれていると考えることができる。一方で唯物論者はそのような信仰を共有することができない。ブリュノはクリスチャーヌの死体を見て「クリスチャーヌの身体はもはや愛することができない²³」と考える。唯物論的世界におい

²⁰ « Il y avait encore de longs moments — et, en fait, il y en a toujours — où Valérie n'était absolument pas morte. » PF 339/384.

²¹ PI 432/85.

²² « En nous quittant je serrai longuement la main de Robert, qui marmonna quelque chose que je ne compris pas du tout ; il tremblait un peu, malgré la douceur de la température. Il me faisait de la peine, ce vieux matérialiste, avec ses traits creusés par le chagrin, ses cheveux avaient blanchi d'un seul coup. [...] Je pris alors conscience qu'Harry supporterait probablement bien mieux que Robert la disparition de sa femme ; il pouvait se représenter Hildegarde jouant de la harpe au milieu des anges du Seigneur, ou, sous une forme plus spirituelle, blottie dans un recoin topologique du point oméga, quelque chose de ce genre ; pour Robert le Belge, la situation était sans issue. » PI 549/220.

²³ « Le corps de Christiane ne pourrait plus aimer » PE 829/340.

て、愛する人の死は愛される可能性の喪失であり、すなわち愛の終わりである。したがって、愛する人の死という出来事は愛を終わらせるという点で愛の障害となっているのである。

このように、唯物論がもたらした絶対的な終わりとしての死は、個人間の結びつきを不可能にする個人主義を生み出すことに加え、愛する人との永遠の別れを引き起こす。『素粒子』から『ある島の可能性』までの長編小説三作において、唯物論によって性質が変化した死によって引き起こされる分離が問題視されていることを踏まえると、「愛は結びつける、それは永遠に結びつける。善の実践とは結びつけることであり、悪の実践とは結びつきを解くことである。分離は悪の別名である²⁴」と断言する『素粒子』のミシェルはウエルベックの代弁者であるように思われる。そしてミシェル＝ウエルベックの観点からすると、結びつきを妨げる死は、愛の正反対に位置する悪であると言える。したがって、ウエルベックの小説において唯物論による死の性質の変化が問題となるのは、性質の変化によって死が愛を妨げる悪となっているからだと考えられる。では、ウエルベックの小説において、この悪への抵抗はどのように描かれているのだろうか。

2. 『素粒子』におけるクローン技術と人類の滅亡

『素粒子』の主人公のひとりであり天才的な分子生物学者であるミシェル・ジェルジンスキは、もうひとりの主人公ブリュノと同様に、小説の終盤で恋人アナベルの死を経験する。その後アイルランドに渡ったミシェルは人間のクローン技術を可能にする理論の研究に没頭する。ミシェルはまず、「あらゆる有性種は必然的に死すべき定めにある²⁵」ということを証明したのち、ミシェル自身は姿を消す（おそらく自殺したと考えられている）。その死後、彼の最後の業績がまとめられて出版される。そこに記された理論により、「その複雑さにかかわらず、あらゆる遺伝子コードは乱調や変異が起こらない構造的に安定した標準形式のもと書き直すことが可能となる。ゆえに、いかなる細胞にも無限に連続して複製する能力を与えることが可能となる。進化の程度にかかわらず、あらゆる動物種をクローン技術によって複製可能で、類縁的な、不死である種に作り変えることができる²⁶」。

この仕事を引き継いだハブゼジャックは、次のような「ジェルジンスキの仕事から導かれる急進的な命題²⁷」を掲げて研究を進めていく。「人類は消滅しなければならない。性別をもたず不死であり、個人性、分離、生成変化を超越した新しい種を、人類は誕生させなければならない²⁸」。また、ハブゼジャックは人間の生殖器に存在するクラウゼ小体をクローンの全身に分布させることで「新しい、前

²⁴ « *L'amour lie, et il lie à jamais. La pratique du bien est une liaison, la pratique du mal une déliaison. La séparation est l'autre nom du mal* » PE 894/412.

²⁵ « toute espèce sexuée [est] nécessairement mortelle » PE 888/406.

²⁶ « tout code génétique, quelle que soit sa complexité, [peut] être réécrit sous une forme standard, structurellement stable, inaccessible aux perturbations et aux mutations. Toute cellule [peut] donc être dotée d'une capacité infinie de réplifications successives. Toute espèce animale, aussi évoluée soit-elle, [peut] être transformée en une espèce apparentée, reproductible par clonage, et immortelle » PE 899/420.

²⁷ « cette proposition radicale issue des travaux de Djerzinski » PE 900/421.

²⁸ « l'humanité [doit] disparaître ; l'humanité [doit] donner naissance à une nouvelle espèce, asexuée et immortelle, ayant dépassé l'individualité, la séparation et le devenir » PE 900/421.

代未聞と言っていいエロティックな感覚²⁹」がクローンにはもたらされるとしている。つまり、『素粒子』のクローンは、無性であり、不死であり、個人性がなく、分離することなく、そして無限の快樂を得られる存在であると考えられる。そのようにして生まれた存在は次のように述べる。「人間から見て、我々は幸福に暮らしている。彼らには乗り越え不可能であったエゴイズムや残酷さや怒りによる支配から、我々が脱することができたのは確かである³⁰」。

このように『素粒子』のクローンは死を否定することに成功し、分離することなく、つまり愛を実現して生きている。科学技術による不死への抵抗は成功したかのように思われる。しかし、問題がふたつある。ひとつは、このクローンに付された要素が複数に渡るため、果たして不死の達成によってこのような幸福な暮らしに至ったのかが分からないということである。不死でさえあればいいのか、それとも他の要素が必ずなければいけないのか、あるいは他の要素の方が不死よりも重要なのか。もうひとつは、このクローンはハブゼジャックの言うとおりの「新しい種」であり、人間とは呼べないということだ。つまりこの新種は人類とは生物学的に根本から異なる存在であり、このことは人類が不死の恩恵を受けることができていないということを意味する。

ニール・スリーナンは、『素粒子』と『ある島の可能性』における新ダーウィン主義的な進化論的自然主義と新自由主義的資本主義の関係性について考察する論文において、後者の問題について検討している。彼によれば、ウエルベックが自身の小説にダーウィニズムを取り入れるのは、その大衆化に対して批判的に応答するためである。現代において、大衆化したダーウィニズムは新自由主義的イデオロギーの正当化に用いられる。「十九世紀半ばに登場したダーウィンの自然選択という考えは、自由市場における競争というイデオロギーを生物学の側から支持する。加えて、それはこのイデオロギーが人間の物質的・生物学的な存在の根本に書き込まれているという考えをも支持する³¹」。そしてこの新自由主義的唯物論は、「資本主義の外の世界だけでなく我々の生物学的進化の能力の先にある世界さえをも想像できなくさせてしまう状況³²」を生み出す。このように、人間を物質的・生物学的存在に切り詰めてダーウィニズムを濫用する新自由主義的唯物論は、競争が人間という種に適合するものであり、ゆえにそのような競争社会から抜け出すための進化は起こらないと喧伝する。そして、このような論理を無批判に受け入れることで、この状況から脱するためには人間であることをやめなければならないというハブゼジャック的な科学技術に根ざしたポストヒューマニズムが生じてくる³³。

²⁹ « des sensations érotiques nouvelles et presque inouïes » PE 904/425.

³⁰ « À l'estimation des hommes, nous vivons heureux ; il est vrai que nous avons su dépasser les puissances, insurmontables pour eux, de l'égoïsme, de la cruauté et de la colère » PE 909/430.

³¹ « the advent of Darwinian natural selection in the mid-nineteenth century supports in biological terms the ideology of free market competition, but also the idea that this ideology is inscribed at the foundational levels of our material, biological existence as humans » Niall Sreenan, « Universal, acid: Houellebecq's clones and the evolution of humanity », *Modern & Contemporary France*, Vol. 27, no. 1, 2018, p. 7.

³² « the conditions within which it is not merely impossible to imagine a world outside capitalism but beyond the capacity of our biological evolution » *Ibid.*, p. 7.

³³ 本論文において「ポストヒューマニズム」という用語は、科学技術によって人間の能力を拡張し、最終的にはまったく新しい種、すなわちポストヒューマンを生み出すことを目的とするようなトランスヒューマニズムの意味で用いる。Cf. Francesca Ferrando, « Posthumanism, Transhumanism, Antihumanism,

彼の掲げるスローガン「変動は精神的なものではなく、遺伝子的なものとなるだろう³⁴」は、その特性をよく表している。スリーナンによれば、たしかに『素粒子』は、科学技術によって人間を解放することができるという科学技術的楽観主義に隠された傲慢さを描き、それを皮肉なものとして読むことができる。一方で、まさにその楽観主義から生まれた時間的にも物質的にも人類とは隔たった未来のクローンが物語を語るという構造によって、新自由主義的唯物論を強化しているとも言える。

この作品におけるクローンによる時間的にも物質的にも隔たった語りの視点は、人間の後期資本主義社会における下劣な唯物論に対する批判的、パロディ的、哲学的ないかなる距離をも提供しない。逆に、それはそのような距離は妄想に近いのではないかという疑いや、そのような距離を取る可能性さえもが人類の滅亡と引き換えにしか手に入らないのではないかという疑いを深めるだけである。³⁵

このように『素粒子』のクローンは人類の滅亡と引き換えに成立している。科学技術的楽観主義に支えられた、一見成功したように思われる死を否定する試みは、結局人類にとっては失敗である。加えてそれはウエルベックにとっても失敗であったかのように思える。というのも『プラットフォーム』と『ある島の可能性』において『素粒子』のクローンに付与された性質が取り上げ直され、それらによって人間のまま死に抵抗し分離のない幸福な生に達することができるのかどうかを検討され直されていると考えられるからだ。

3. 『プラットフォーム』における性と死の対立

ウエルベックの小説における死への抵抗というと真っ先に思い浮かぶのは、『素粒子』や『ある島の可能性』で描かれるクローン技術による肉体の不死の実現であるだろう。一方、『プラットフォーム』ではそれが描かれることはない。したがって、死のテーマに関して『素粒子』と『ある島の可能性』が関連させて論じられることが多い一方、『プラットフォーム』は比較検討の対象から除外されることが多かった³⁶。しかし『プラットフォーム』においても、肉体の不死の実現とは異なるが、死

Metahumanism, and New Materialisms: Differences and Relations », *Existenz, An International Journal in Philosophy, Religion, Politics, and the Arts*, Vol. 8, no. 2, 2013, pp. 26-32.

³⁴ « LA MUTATION NE SERA PAS MENTALE, MAIS GÉNÉTIQUE » PE 907/428. 強調原文。

³⁵ « The temporally and materially dislodged narrative perspective of the clone in this work, then, does not offer critical, parodic, or philosophical distance from the tawdry materialism of late capitalist human society, but merely deepens the suspicion that either this distance is founded on an illusion or that the very possibility of such a distance would cost us our extinction. » Niall Sreenan, art. cit., p. 14.

³⁶ 死のテーマに関して『素粒子』と『ある島の可能性』を関連させて論じている論文にはたとえば以下のものがある。Susannah Ellis, « Communautés (im)mortelles ? : La politique posthumaine à l'œuvre dans les textes de Michel Houellebecq », in Hélène Machinal, Elaine Després (dir.), *PostHumains : Frontières, évolutions, hybridités*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2019, pp. 137-152. 一方で、たとえばモー・グランジェ・ルミは、『ある島の可能性』に描かれるクローンが、『プラットフォーム』に描かれる観光客に似ていると指摘している。しかしながら、彼女は死というテーマに関する両者の類縁性は指摘していない。Maud Granger Remy, « Le

への抵抗が描かれていると考えられる。なぜなら、『素粒子』のクローンに付された特徴のひとつに無制限の性的快楽があったことを踏まえると、性的快楽あるいは性的なものの力が『プラットフォーム』では検討されているのではないかと考えられるからだ。

ヴェラは自らが死にゆく存在であるという意識から逃れるためにウエルベックの小説で提示される手段のひとつとして、快楽主義を挙げている。それは性的なものと結びついている。「ウエルベックにおける主要なイデオロギーのひとつである快楽主義は、感覚することを強迫観念的に絶え間なく求める心性を必然的に生み出す。[...] ウエルベックの小説においては、快楽主義的な執着は何よりも性的なものと結びついている³⁷」。実際、『プラットフォーム』において、性と死は対立するものとして描かれているように思われる。ここでは、性的なものによって死の観念を押し退ける、あるいは乗り越えようとする暗示的な場面をふたつ取り上げる。

『プラットフォーム』の冒頭、主人公ミシェルは父の死後に休暇を申請し、タイのパッケージツアーに参加する。そこで彼はいわゆる死の鉄道や戦争博物館、連合軍捕虜の墓地を訪れる。そのような死を強く意識させられる状況において、ミシェルは「ここでたくさんのバカが民主主義のために死んだんだ³⁸」とつぶやくなど、冷笑的な態度を取る。一見、このエピソードはミシエルのそのような冷笑的な性格を強調するためのものであるように思われる。しかし、このような死を強く感じさせる場面の次の段落で、唐突にミシェルがはじめて女性器を見たときの思い出が語られる。「十一歳のとき、ある少女がはじめて性器を見せてくれた。僕はすぐさま感嘆の念を抱き、その割れ目のある奇妙で小さな器官が大好きになった。[...] すべてがつい最近のここのように思われる。僕は自分がそれほど変わったとは思えない。女性器に覚える興奮は衰えていない³⁹」。この死と性の唐突な並置は読者を驚かせる。なぜミシェルは、死を強く感じさせる場面の直後に、自らの「女性器に覚える興奮が衰えていない」ことを確認するのだろうか。

この疑問に答えるために、性的なものと死が並置されている別の箇所を見てみよう。タイ旅行中に、ホテルの部屋で眠ったミシェルは、メトロのなかで踊るアラブ系の女性が服を脱いで自分を誘惑してくるのに応じて、他の乗客がいるなかで彼女に挿入するというエロティックな夢を見る。ミュリエル・リュシー・クレマンはこの夢を、誘惑に応じて挿入するミシエルの姿に注目し分析している。彼女によれば、この夢は男性的な幻想を表しているのだという。

ミシェルは、普段通りにではなく、そうありたい自分の姿にしたがって振る舞っている。夢の可能性とは、言い寄ってくる見知らぬ女性に積極的に応えることができない男性の無能を捨てさせ

tourisme est un posthumanisme Autour de *Plateforme* », in Sabine van Wesemael, Murielle Lucie Clément (dir.), *Michel Houellebecq sous la loupe*, Amsterdam/New York, Rodopi, 2007, p. 286.

³⁷ « Hedonism, one of the leading ideologies in Houellebecq, entails a mentality obsessed with the relentless search for sensation. [...] In Houellebecq's fiction, the hedonistic fixation is above all tied with sexuality » David Vella, art. cit., p. 143.

³⁸ « ici, tout un tas d'imbéciles sont morts pour la démocratie » PF 67/70.

³⁹ « J'avais onze ans la première fois qu'une fille m'avait montré sa chatte ; tout de suite j'avais été émerveillé, j'avais adoré ce petit organe fendu, étrange. [...] Tout cela me paraissait récent, je n'avais pas l'impression d'avoir tellement changé. Mon enthousiasme pour les chattes n'avait pas décliné » PF 68/71.

ることである。彼の想像力は彼の幻想、すなわち彼が頼まずとも単刀直入に身体を差し出してくる女性という幻想のただなかに彼を引き込む。⁴⁰

したがって、「夢は貧相なりビドーを補助する機構として機能している⁴¹」。クレマンは、この夢は現実では発揮されない語り手の性的能力を示すものであり、「夢幻状態の世界では、語り手の性的無能は消滅している⁴²」と結論づける。

クレマンはこの夢にだけ注目しているが、我々はこの夢に続く段落にも目を向けることによってこの分析をより深めたい。そこでは目を覚ましたミシエルの様子が次のように描かれている。

僕は五時ごろ目を覚まし、シーツに精液の大きなしみができていることに気がついた。夢精だ……ほろりとした。さらに気がついたのだが、驚いたことにまだ勃起していた。[...] ナイトテールの真ん中でゴキブリが仰向けになっていた。その足の細かいところまではっきり見える。ゴキブリはもう心配の種じゃない。親父ならそう言っただろう。親父は西暦二千年の末に死んだ。
[...] 僕は生き残っていた、可もなく不可もない状態で。僕は四十代だった。とはいえ四十代になっただけ、要するにまだ四十歳だった [...] 僕にはまだ余力がある。⁴³

このエロティックな夢により、そのなかだけでなく、現実においてもミシエルの性的能力が確認されている。彼は自らの性的能力が健全であるということを実感し、感動を覚える。そして、仰向けになったゴキブリ、亡くなった父親という死を象徴するものたちに気を揉むことがなくなる。実際、この場面までは多く言及されていた父親について、この場面ののちに言及されることがなくなる。そして自分の年齢を肯定的に捉え直す。つまり、「女性器に覚える興奮」や、実際の自身の性的能力が維持されていること、すなわち性的なものは、死を意識から遠ざけることに役立っているのである。このように、『プラットフォーム』のミシエルには、性と死を対立させ、性によって自らが死にゆく存在であるということから目を背ける態度が見られる。

では、このような性による死の否認は、愛、あるいは分離のない幸福な生をもたらすのだろうか。この疑問に答えるために、『プラットフォーム』には、性的なものの負の側面が描かれているということを指摘したい。それは、性的快楽の追求は残酷行為へと行き着く恐れがあるという側面である。

⁴⁰ « Michel se conduit selon celui qu'il voudrait être plus que selon celui qu'il est au quotidien. Les possibilités du rêve font tomber l'incapacité de l'homme à répondre positivement aux avances d'une femme inconnue. Son imagination l'entraîne au cœur de son fantasme, la femme qui s'offre à lui sans ambages, sans qu'il ait à demander, provoquer quoi que ce soit. » Murielle Lucie Clément, *Michel Houellebecq revisité : l'écriture houellebecquienne*, Paris, L'Harmattan, 2007, p. 22.

⁴¹ « Le rêve fonctionne comme mécanisme compensatoire de sa libido appauvrie. » *Ibid.*, p. 23.

⁴² « dans l'univers de l'onirisme, les inhibitions du narrateur disparaissent » *Ibid.*, p. 23.

⁴³ « Je me réveillai vers cinq heures, constatai que les draps étaient largement tachés de sperme. Une pollution nocturne... c'était attendrissant. Je constatai aussi, à ma vive surprise, que je bandais encore [...]. Un cafard reposait, allongé sur le dos, au milieu de la table de nuit ; on distinguait nettement le détail de ses pattes. Celui-là n'avait plus de soucis à se faire, comme aurait dit mon père. Mon père, pour sa part, était mort fin 2000 [...]. [...] Moi-même je survivais, dans un état moyen. J'étais dans la quarantaine, enfin dans le début de la quarantaine, je n'avais après tout que quarante ans [...] je n'avais pas dit mon dernier mot. » PF 91/97. 強調原文。

文化省で現代文化の展覧会を担当しているミシェルは、ベルトラン・ブルダヌという芸術家の展覧会を企画する。展覧会のオープニング・パーティー後、この芸術家に誘われてミシェルとヴァレリーはSMクラブへと向かう。しかしヴァレリーはそこで目にした残虐な光景にショックを受ける。嫌悪感をあらわにするヴァレリーに対して、ブルダヌは「人は苦痛や残酷、支配や隷属に近づくことによって、本質的なもの、性の本性に触れるんだ⁴⁴」と述べる。店を後にしたヴァレリーはSM行為には「もはやいかなる肉体の接触もなく⁴⁵」、ゆえにSM行為は「セックスの対極にあるものだ⁴⁶」と嫌悪感の理由を説明する。ミシェルは、ヴァレリーに理解を示しながらも「しかしおそらくSM信奉者はSM行為のなかにこそ、セックスの極致、究極形を見ているのだろう。その究極形においては誰もが自分の肌の内側に閉じこもり、ひとりである感覚に全身を任せるのだ⁴⁷」と考える。ミシェルからすれば、SM行為はたしかに性行為に属している。しかしそれには愛が欠けている。「愛しあう人々のセックスがあり、愛しあわない人々のセックスがある⁴⁸」。つまり性的なものは、死に対する意識から目を背けさせてくれるという点で愛にとって必要であるとしても、愛の十分条件ではない。

しかしながら、『プラットフォーム』は、最終的には性的なものによる死の否認すら不完全なものであることを明らかにしてしまう。不完全であるのは、性的なものによって自分自身の死の意識から目を背けることができるとしても、愛する人の死から目を背けることはできないからである。このことは、『プラットフォーム』の語りの構造と結末付近のミシェルの行動に注目すると明らかになる。

ところで、ウエルベックの小説には直接的な性描写が多く、しばしばポルノ的であると言われる。

彼の小説にはおそらくポルノグラフィ的性質がある。ひとつの章が生殖器への言及なしであることはほとんどない。したがって、明示的な性描写によってあからさまに芸術や公共領域を性的なものにしていると容易に主張できる。⁴⁹

このポルノ性に関して、何人かの研究者たちは商業的な理由があると考えている⁵⁰。直接的な性描写が多いという特徴は『プラットフォーム』にも当てはまるが、語りの構造に注目すると、そこには商業的目的以外の理由があると思われる。先に述べたように『プラットフォーム』は、そのラストにお

⁴⁴ « en s'approchant de la souffrance et de la cruauté, de la domination et de la servitude, on touche à l'essentiel, à la nature intime de la sexualité » PF 191/212.

⁴⁵ « il n'y a plus aucun contact physique » PF 193/215.

⁴⁶ « exactement le contraire de la sexualité » PF 194/215.

⁴⁷ « mais je suppose que les adeptes du SM auraient vu dans leurs pratiques l'apothéose de la sexualité, sa forme ultime. Chacun y restait enfermé dans sa peau, pleinement livré à ses sensations d'être unique » PF 194/215.

⁴⁸ « Il y a la sexualité des gens qui s'aiment, et la sexualité des gens qui ne s'aiment pas. » PF 194/216.

⁴⁹ « Ses romans ont sans doute un caractère pornographique : il est rare qu'un chapitre s'écoule sans référence aux organes génitaux. On peut ainsi affirmer sans trop de difficulté que ses descriptions explicites participent à l'apparente sexualisation de l'art et de la sphère publique. » Mads Anders Baggesgaard, « Le corps en vue – trois images du corps chez Michel Houellebecq », in Sabine van Wesemael, Murielle Lucie Clément (dir.), *Michel Houellebecq sous la loupe*, Amsterdam/New York, Rodopi, 2007, p. 241.

⁵⁰ Cf. Franc Schuerewegen, « He Ejaculated (Houellebecq) », *L'Esprit Créateur*, Vol. 44, no° 3, 2004, p. 47. ピエール・ヴァロはこの点に関してカトリーヌ・ミエの小説を引き合いに出している。Pierre Varrod, « Michel Houellebecq : Plateforme pour l'échange des misères mondiales », *Esprit*, Vol. 279, no° 11, 2001, p. 104.

いて、恋人を失ったミシェルがパタヤ・ビーチで自らの死を待ちながら書いたものだと明かされる。すなわち、小説全体が恋人の死を経験した人物の観点から語られているのである。ここで先ほど確認したように『プラットフォーム』のミシェルには性的なものによって死から目を背けようとする態度が見られることを踏まえると、小説全体において、ヴァレリーという恋人の死から目を逸らすことが試みられており、ゆえに『プラットフォーム』において直接的な性的描写が多くなっていると言える。しかし、最終的にこのような性的なものによる死への抵抗は有効でないということが示される。パタヤ・ビーチでヴァレリーの不在に苦しむミシェルは娼婦を買うことにする。しかしながら、その結果明らかになるのは、性的快楽によっては愛する人の死を乗り越えることができないということである。

滞在三ヶ月目のはじめ、ようやく僕はマッサージサロンやホステスパブにもう一度行ってみることに決めた。最初は、ほんとうにどうしても行きたいというわけではなかった。まったく勃たないということになるのが怖かった。しかしながら、僕は勃起できた。そして射精もできた。しかしもう二度と快楽を感じることはなかった。⁵¹

そしてミシェルは、ヴァレリーの死という現実を認識している理性的状態と、その現実を否認しヴァレリーがまだ生きていると思い込んでいる非理性的状態とを往復しながら、ただ自らの死を待ちつづけることになる。

性的快楽はたしかに自分自身の死から目を背けることに役立つかもしれない。しかしながらそれは愛にとっての十分条件ではなく、また愛する人の死から目を背けることには役立たない。つまり、『プラットフォーム』においては、性的快楽のもつ死を否定する力、分離のない幸福な生へと導く力が試されているが、結果としては、その力の不十分さが示されているのだ。

4. 『ある島の可能性』におけるクローン技術と新たな可能性

性的快楽による死の否定が不十分であることを『プラットフォーム』で描き出したウエルベックは『ある島の可能性』において、ふたたびテクノロジー、とりわけクローン技術、による死の否定の試みを描く。この小説は、現代を生きるダニエルが書いた「人生記 *récit de vie*」という自伝的な文書とその二千年後の未来に生きるダニエルのクローン、ダニエル 24 と 25 による「人生記」への注釈が交互に配置されるという物語構造を持つ。この未来においては、クローンの寿命が尽きるたびに新しいクローンが製造されることで肉体の不死が保証されており、加えて、オリジナルの人間が書いた「人生記」を読むことで人格の連続性が得られるとされている。まず我々は、『ある島の可能性』におけるクローン誕生までの経緯を確認し、この小説におけるクローンに付された性質を確認する。それによ

⁵¹ « Au début de mon troisième mois de séjour, je finis par me décider à retourner dans les salons de massage et les bars à hôteses. *A priori* l'idée ne m'enthousiasmait pas vraiment, j'avais peur de connaître un fiasco total. Pourtant je réussis à bander, et même à éjaculer ; mais je n'ai plus jamais connu le plaisir. » PF 350/397. 強調原文。

り明らかになるのは、そこで描かれるクローンは『素粒子』におけるものとは大きく異なっているということである。

4-1. 新しい種、あるいは新しい人類

ダニエルは成功したコメディアンであるが、妻のイザベルと別れたのち、エロヒム教という新興宗教のセミナーに VIP として招待される。エロヒム教の教えによれば、人間とはかつて地球に到来したエロヒムという物質的存在に作られた存在であり、「エロヒムにふたたび到来してもらい、死から逃れる方法を教えてもらうために、我々（ようするに人類）は前もって彼らのために大使館を建てなければならない⁵²」。このようにエロヒム教は信者に不死を約束する宗教であるが、ただエロヒムの到来を待っているだけではない。科学技術、とりわけクローン技術を用いることで不死を獲得する研究がこの教団では行われている。セミナーで教団の幹部たちや、他の VIP である芸術家のヴァンサンと交流したダニエルは、数年後、大規模な教団のセミナーにふたたびヴァンサンとともに招待される。しかし、そこで教団の預言者が殺害されるという事件が起こる。困り果てた幹部たちにヴァンサンは自分が預言者の息子であることを明かし、クローン技術によって生き返った預言者として信者たちの前に姿を現す。ヴァンサンは教団のリーダーとしての才能を開花させ、巧みな広告戦略によって、信者を増やしていく。この拡大の理由は、ダニエル 25 によって次のように説明される。

ある意味、エロヒム教は、若さを最も望ましい価値にし、伝統や古来の宗教を尊重する気持ちを少しずつ破壊してきた資本主義的消費社会のあとを進んでいた。なぜなら、エロヒム教はまさにこの若さ、そしてそれに結びつく快楽を無際限に保つことを約束していたからだ。⁵³

つまり、ヴァンサンが率いるエロヒム教は「人間存在を利益と快楽のカテゴリーだけに還元する⁵⁴」現代の「レジャー文明 [la civilisation des loisirs] ⁵⁵」に最適化された宗教として自らを示し、その文明の永続化を謳うことで勢力を拡大させる。その永続化を保証するのは「死に対する勝利 [la victoire contre la mort] ⁵⁶」である。「エロヒム教は霊的あるいは複雑な側面をすべて排除し、約束をその本質である、[死に対する] 勝利がもたらす実質的な余命の延長、つまり肉体的な欲望の果てしない満足のみに絞り込んだ⁵⁷」。このように、『素粒子』におけるハブゼジャックの、人類は絶滅し新しい種が生まれる

⁵² « Pour que les Élohim reviennent, et nous révèlent comment échapper à la mort, nous (c'est-à-dire l'humanité) dev[ons] auparavant leur construire une ambassade. » PI 463/120.

⁵³ « l'élohimisme marchait en quelque sorte à la suite du capitalisme de consommation — qui, faisant de la jeunesse la valeur suprêmement désirable, avait peu à peu détruit le respect de la tradition et le culte des ancêtres — dans la mesure où il promettait la conservation indéfinie de cette même jeunesse, et des plaisirs qui lui étaient associés » PI 702/390.

⁵⁴ « réduisant l'existence humaine aux catégories de l'intérêt et du plaisir » PI 706/394.

⁵⁵ PI 706/393.

⁵⁶ PI 706/394.

⁵⁷ « Éradiquant toute dimension spirituelle ou confuse, il limitait simplement la portée de cette victoire, et la nature de la promesse, à la prolongation illimitée de la vie matérielle, c'est-à-dire à la satisfaction illimitée des désirs physiques. » PI 706/394.

べきだというキャンペーンとは逆に、エロヒム教は信者に対して快楽を享受する個人としての永遠の生を約束する。

しかし、『ある島の可能性』には、信者に向けた教団の外的態度だけでなく、その舞台裏も描かれている。すなわち、人間とクローンとの断絶へと向かっていくヴァンサンと教団の様子が描かれているのだ。ヴァンサンはクローン技術によって不死を得た存在を「人間に置き換わるべく定められた新しい種⁵⁸」として、「ネオ・ヒューマン *néo-humain*」と呼称する。加えて、「学者 *Savant*」とダニエルにあだ名される登場人物はヴァンサンが描いたデッサンから着想を得て、「標準遺伝子の書き換え [*la Rectification Génétique Standard*]⁵⁹」を行うことによって、クローンを光合成によって水とミネラルのみで生きられるように設計する。この書き換えについてダニエルは、人間とネオ・ヒューマンとの断絶を生むものだと考える。

〔この書き換え〕は、ふたたび息を吹き込まれることになっているすべての DNA のユニットに一貫して適用され、ネオ・ヒューマンとその先祖とを決定的に断絶させるに違いない。遺伝子コードのその他の部分は変えられない。それでも、それは新しい種、より正確に言えば、新しい霊長類となる。⁶⁰

ヴァンサンのもとでこのように人間とネオ・ヒューマンとの断絶が図られていくが、その極致として現れるのが、大使館の性質の変化だ。先に述べたように、エロヒム教はエロヒムの再来に備えて彼らを受け入れるための大使館を建造することを目的のひとつとしていた。しかし、その仕事を引き継いだヴァンサンによって作られた大使館の性質は当初考えられたものとは大きく異なっている。旧預言者がランサローテ島で豪華絢爛に建造することに決めていた大使館は、ヴァンサンによってパリの倉庫内にひとつの部屋として作られる。その部屋の内部は強力な光で満ちており、そこに入ったダニエルはこのまま消失したいという欲望に駆られる。この大使館に関して、オレリアン・ベランジェは「この大使館はなによりも死に至らせる機械である。それは光の束のなかで肉体と精神を分離させ、〔DNA の〕保存という儀式のあとに行われるこの新宗教の二番目の秘蹟、すなわち安楽死という秘蹟を実現する⁶¹」。実際、完成した大使館をダニエルに見せる際にヴァンサンは、「この世を去り、次に肉体を得るまでの待機に入るとき⁶²」には、そこで服毒自殺をするつもりであり、信者たちもそうすることになるだろうと述べる。加えて、彼は大使館の作成において、ボードレールの「貧しい人々の死 *La Mort des Pauvres*」という詩から着想を得たと認める。ここにおいて、死は避けたいものから我々

⁵⁸ « la nouvelle espèce appelée à remplacer l'homme » *Ibid.*, PI 347/330.

⁵⁹ PI 719/408.

⁶⁰ « [cette rectification] devait être appliquée, uniformément, à toutes les unités d'ADN destinées à être rappelées à la vie, et marquer une coupure définitive entre les néo-humains et leurs ancêtres. Le reste du code génétique restait inchangé ; on n'en avait pas moins affaire à une nouvelle espèce, et même, à proprement parler, à un nouveau règne » PI 719/408.

⁶¹ « l'ambassade est avant tout une machine létale, qui dissout le corps et l'esprit dans des faisceaux de lumière pour réaliser, après la cérémonie du prélèvement [de l'ADN], le second sacrement de la nouvelle église : le sacrement d'euthanasie » Aurélien Bellanger, *Houellebecq, écrivain romantique*, Paris, Éditions Léo Scheer, 2010, p. 224.

⁶² « le moment de quitter ce monde, et d'entrer dans l'attente de la prochaine incarnation » PI 754/448.

を慰めるものへと変化している。それは、なぜか。ベランジェは大使館の性質の変化について、「大使館はもはや歓迎の場ではなく、移行の場である⁶³」と説明する。当初、人間がエロヒムを受け入れるための場所として構想されていた大使館は、ヴァンサンによって、人間自身がエロヒム、あるいは不死の新種へと移行するための場所へと変えられる。つまり、人間という種における死によって、不死の存在であるネオ・ヒューマンが誕生するのであり、この意味でネオ・ヒューマンに移行する人々にとって自らの人間としての死は慰めなのである。ここにおいて「ヴァンサンは創設神話として、生は技術的な所与でしかなく、それを支配することで人間を新しい種に作り替えることができるという考えを保持している⁶⁴」。科学技術によって人間をそれとは断絶した別の新しい種に作り替えるというこの発想は『素粒子』におけるハブゼジャックのポストヒューマニズムを思い起こさせる。したがって、『ある島の可能性』においてヴァンサンは『素粒子』的な種の断絶の意識を引き継いでいるように思える。

しかし、ヴァンサンが目指す断絶は実のところ完全なものではない。なぜなら、ネオ・ヒューマンにはオリジナルと連続した人格、すなわち個性が残されるからだ。実際、『素粒子』のプロローグとエピローグに登場するクローンは一人称複数形のみを用いて語るのに対し、『ある島の可能性』のクローンたちは、ダニエル 24、25 のように個別のシリーズ名を持ち、他のクローンシリーズとは区別されている。この個人性は、ネオ・ヒューマン自身にも把握されており、ダニエル 24 は「人間と同じく、我々は個という状態から解放されていない⁶⁵」と述べる。このように、『素粒子』では同一種が同一の遺伝子コードを持つことで、根本的に個人性が消滅させられていたのに対し、『ある島の可能性』では生物学的次元においても、意識の次元でも個人性が残されている。すなわち、このふたつの小説においては愛を実現するために要求される断絶の程度が異なっているのだ。実際、ヴァンサンは不死という条件さえ達成できれば愛が可能になると考えている。彼は、自らが作成した大使館を「愛 *l'amour*⁶⁶」と呼ぶ。「人間はこれまで愛することができなかった。不死の状態以外では決して [...]。僕らは不死を、そして世界との共存を再発見した⁶⁷」。『ある島の可能性』におけるクローンには、「標準遺伝子の書き換え」と不死の獲得により、たしかに人間と生物学的に断絶している部分はあるが、オリジナルの現代人が持つ個人という意識は引き継がれており、したがって人間との連続性が残されているのだ。実際、『素粒子』のポストヒューマン的クローンが自らを「神 *dieux*⁶⁸」と呼称する一方、『ある島の可能性』のクローンはあくまでも「ネオ・ヒューマン」、新しい人類なのである。

⁶³ « L'ambassade n'est plus une zone d'accueil, mais un lieu de transit, et comme une mort infiniment améliorée » Aurélien Bellanger, *Houellebecq, op. cit.*, p. 224.

⁶⁴ « Vincent garde du mythe fondateur l'idée que la vie n'est qu'une donnée technique, dont la maîtrise transformera l'homme en une espèce nouvelle » *Ibid.*, p. 225.

⁶⁵ « Pas plus que les humains nous ne sommes délivrés du statut d'individu » PI 493/154. 強調原文。

⁶⁶ PI 756/451. 強調原文。

⁶⁷ « L'homme n'a jamais pu aimer, jamais ailleurs que dans l'immortalité [...]. Nous avons retrouvé l'immortalité, et la coprésence au monde » PI 756-757/451.

⁶⁸ PE 909/430.

4-2. 個人主義の極致としてのネオ・ヒューマンの生

では、このように個人性を保ちつつ不死を手に入れたネオ・ヒューマンたちはどのような暮らしをしているのだろうか。彼らはそれぞれ、世界中に点在するシェルターに分離して居住しており、物理的に互いに接触することがない生活を送っている。すなわち『プラットフォーム』においてヴァレリーが愛の条件だと考えた肉体の接触が彼らには欠けている。ネオ・ヒューマン同士のコミュニケーションは、「インターメディエーション [intermédiation]」と呼ばれ、基本的には文字チャットによって、時には音声や映像を用いてコミュニケーションが取られている。ダニエル 24 によればこのような暮らしにおいては、結びつきへの欲求が失われている。「あらゆる集団が消滅し、あらゆる部族が散開した今日、我々は孤立しながらも互いを同類であると感じている。しかし結びつきたいという欲求は失われてしまった⁶⁹」。この状況は個人主義の極致と言える。加えてネオ・ヒューマンたちは、無限の性的快楽を享受しないどころか、そもそも情動や欲望すらもが薄まっている。彼らは「静かで観想的な、かつての人間からすれば、耐えられないほど退屈であるかもしれない生活⁷⁰」をしている。このように、彼らは不死であるという点以外は『素粒子』のクローンとは真逆の生活をしており、エロヒム教が約束していた「肉体的な欲望の果てしない満足」とも正反対の暮らしをしているのである。実際、ダニエル 25 は物語の終盤において「僕のこの人生は、ダニエル 1 が生きていたと思っていたそれとはまったく異なっている⁷¹」と述べている。このことは、たしかに不死という死の否定が、愛があり分離のない幸福な生活の十分条件ではないことを示している。しかしながら、いくつかの先行研究におけるように、この不死性こそがこのような分離した生活の原因であると考えすることは性急である⁷²。

実際、ネオ・ヒューマン自身の生物学的変化以外にも、二千年後の未来と現代とで異なっている要素がある。ひとつは環境の変化である。ダニエル 24 や 25 の生きる二千年後の未来に至るまでに原子爆弾の投下や、気候変動の影響で、人口は大幅に減少し、人間の文明は崩壊し、世界は荒れ果てている。もうひとつは、宗教の変化である。二千年後の未来においてネオ・ヒューマンたちを束ねているのは、エロヒム教ではない。「至高のシスター la Sœur suprême」と呼ばれる存在のもと、未来人の到来を待つという宗教がネオ・ヒューマンたちを支配している。「至高のシスター」の教えは仏教的であると言える。なぜならこの宗教においてネオ・ヒューマンたちには、自らのオリジナルである人間が書いた「人生記」を読み、それに注釈をつける行為を通じて、人間的な欲望や感情を乗り越えること、すなわち「仏教で言うところの煩悩の滅却 [l'extinction du désir en termes bouddhiques] ⁷³」が求められて

⁶⁹ « Aujourd'hui que tout groupe est éteint, toute tribu dispersée, nous nous connaissons isolés, mais semblables, et nous avons perdu l'envie de nous unir. » PI 493/154.

⁷⁰ « vies calmes, contemplatives, qui seraient probablement apparues, à des humains de l'âge classique, comme d'un insoutenable ennui » PI 770/465.

⁷¹ « Ma propre vie [...] est bien loin d'être celle qu'il [= Daniel 1] aurait aimé vivre. » PI 760/455.

⁷² たとえばクリスチアン・モラルは、ネオ・ヒューマンたちが結びつきたいという欲求を失ったのは、彼らが栄養と生殖に関して他者を必要としない存在になったからだとしている。Christian Moraru, « The Genomic Imperative: Michel Houellebecq's *The Possibility of an Island* », *Utopian Studies*, Vol. 19, no. 2, Penn State University Press, 2008, pp. 276-277. カール・S・グートケも同様の主張をしている。Karl S. Guthke, *Life without End: A Thought Experiment in Literature from Swift to Houellebecq*, New York, Camden house, 2017, p. 140.

⁷³ PI 784/479.

いるからだ。「未来人の到来に備えて我々はあらかじめ人類の弱さ、苦悩、疑いをたどらなければならない。我々はそれらを乗り越えるために一度それらを完全に自分のものにしなければならない⁷⁴」。
さらに、ベランジェは次のような「至高のシスター」の教えは、「不死を愛の根絶と結びつける⁷⁵」ものだと指摘している。

至高のシスターによれば、嫉妬、欲望、生殖欲は存在の苦しみという同一の起源を持っている。
まさにこの存在の苦しみゆえに、我々は緩剤のように他者を求めるのである。我々はこの段階を超えなければならない。そうすれば、存在しているだけでつねに幸せだという状態に達するのだ。⁷⁶

存在することが苦痛であるがゆえに「他者を求める」、すなわち愛を求めるのであり、そこから「嫉妬、性欲、生殖欲」というような人間の「悪しき本能 [instincts mauvais] ⁷⁷」が生じる。愛とはそのような本能の「痕跡 [trace] ⁷⁸」なのである。「至高のシスター」にとって、愛のない世界で生きられるということは、「存在することの苦しみ」から脱却できているということの意味している。それゆえ「至高のシスター」は、不死によって物質的に人間と断絶したネオ・ヒューマンは愛の根絶により精神的にも人間を乗り越えるべきだとする。その教えに導かれ、彼らは苦しみもなければ喜びもない分離した生活を送っているのである。したがって、ネオ・ヒューマンたちの愛とはかけ離れた生活は、不死の獲得という物質的・生物学的条件の変化によってではなく、精神的な変化によってもたらされたものである。

4-3. 失敗、あるいは新しい可能性

このようなネオ・ヒューマンたちの個人主義的生はふたつの失敗を示している。ひとつは、不死こそが愛を実現するための必要十分条件であるというヴァンサンのが考えが誤っていたこと。もうひとつは、『ある島の可能性』において描かれる、個人としての意識を保ったまま不死を実現することで愛を再興しようとする試みが失敗したことである。これまで確認してきたように『素粒子』以降続けられてきたのは、肉体の改変や肉体の快楽という唯物論的手段によって死を否定する試みであった。それは、第一節で確認したように、人間存在を物質的・生物学的存在に還元する唯物論的世界観において、死が愛の障害となっているからであった。しかしその試みの果てに描かれるのは、ジェルジンスキによって死の意識から生まれたとされた個人主義という問題が、肉体の不死による死からの解放に

⁷⁴ « Si nous voulions préparer l'avènement des Futurs nous devons au préalable suivre l'humanité dans ses faiblesses, ses névroses, ses doutes ; nous devons les faire entièrement nôtres, afin de les dépasser. » PI 533/110.

⁷⁵ « associe l'immortalité à l'éradication de l'amour » Aurélien Bellanger, *op. cit.*, p. 243.

⁷⁶ « Selon la Sœur suprême, la jalousie, le désir et l'appétit de procréation ont la même origine, qui est la souffrance d'être. C'est la souffrance d'être qui nous fait rechercher l'autre, comme un palliatif ; nous devons dépasser ce stade afin d'atteindre l'état où le simple fait d'être constitue par lui-même une occasion permanente de joie » PI 721/410.

⁷⁷ Aurélien Bellanger, *op. cit.*, p. 243.

⁷⁸ *Ibid.*, p. 243.

よってはや解決しないということである。ウエルベックは袋小路に入り込んだのだろうか。否。反対に『ある島の可能性』は新たな可能性を開いているように思われる。なぜなら、不死を獲得したにもかかわらず、『ある島の可能性』のネオ・ヒューマンたちが互いに隔絶され肉体の接触のない生を送っているということ、すなわち肉体の不死によっては個人主義が覆らないということは、個人主義という精神を規定するものと、かならず死ぬ運命という身体を規定するものとがかならずしも結びついていないということを意味しているからである。これは、人間の在り方が人間の物質的・生物学的条件のみによって定まるという唯物論的世界観の虚偽を暴いている。『ある島の可能性』における二千年後の未来がほのめかすように、その唯物論的世界観が絶対的なものでないならば、科学技術によって人間の物質的・生物学的条件を改変せずとも、精神的な変容によってその世界観そのものから脱することで、死が愛の障害となることを防ぐことができるはずである。これこそが新しい可能性である。

実際、ネオ・ヒューマンたちの一部が「至高のシスター」の教えに背き、居住地を離れていく様子が『ある島の可能性』では描かれている。ダニエル 25 のインターメディエーション相手であるマリー 23 はそのうちのひとりだ。彼女は人間の遺した「人生記」を読むことで人間的な欲望への郷愁を感じるようになり、ダニエル 1 が遺した詩を読んだことが決定打となって、「自分は人間関係の新しい形を発見したのであり、未来人の到来を待たずとも今すぐに〔ネオ・ヒューマンたちの〕根本的な個人の分離は打ち捨てられることが可能だ〔…〕と考える⁷⁹⁾」ようになった。ダニエル 25 もまた、ダニエル 1 の「人生記」を読むうちに、「ダニエル 1 の運命、彼の矛盾した荒々しい歩み、彼を苛んだ愛の情熱を羨む⁸⁰⁾」ようになる。最終的に、彼もまたマリー 23 と同じようにダニエルが遺した詩を読んだことが決め手となり、エピローグにおいて居住地を去り、新しいコミュニティを探す旅に出ることになる。その旅の最中で、ダニエル 25 は自身とマリー 23 の旅立ちの理由は、愛に対する郷愁であるということを理解する。

ダニエル 1 の物語を注意深く読んだにもかかわらず、僕は相変わらず、人間が愛という言葉で意味しようとしたものを完全には理解できていなかった。人間がこの言葉に与えた多様で相反する意味がどうしてひとつに統合されるのかが分からなかった。〔…〕しかしながら、出発して何週間か経つころには、かつてないほど自分が愛することの近くにいたと感じた。〔…〕そして、この感情に対する郷愁こそがマリー 23 をはるか遠くの大西洋沿岸へと駆り立てたのだと僕は理解した。実を言えば、僕自身も同様に仮説的な道へと駆り出されているのだ。⁸¹⁾

⁷⁹⁾ « s'imaginer [...] qu'elle avait découvert un nouveau mode d'organisation relationnelle ; que la séparation individuelle radicale que [les néo-humains] connaiss[ent] pouvait être abolie dès maintenant, sans attendre l'avènement des Futurs » PI 777/472.

⁸⁰⁾ « à envier la destinée de Daniell, son parcours contradictoire et violent, les passions amoureuses qui l'avaient agité » PI 754/479.

⁸¹⁾ « Malgré ma lecture attentive de la narration de Daniell je n'avais toujours pas totalement compris ce que les hommes entendaient par *l'amour*, je n'avais pas saisi l'intégralité des sens multiples, contradictoires qu'ils donnaient à ce terme [...]. À l'issue pourtant de ces quelques semaines de voyage [...] jamais je ne m'étais senti aussi près d'aimer [...] et je

このように、人間の遺した「人生記」を読みそれに注釈をつけることによってこそ、ネオ・ヒューマンたちは愛に対する欲求とその可能性を感じ、現在の支配的なイデオロギーから抜け出すのであり、自らの物質的・生物学的条件を改変することによってそれに至るのではない。物質的変動によってではなく精神的変動によってこそ、ネオ・ヒューマンたちは愛が可能であるような「人間関係の新しい形」の可能性を感じ取り、新しい世界を探しはじめるのである。

『素粒子』、『プラットフォーム』、そして『ある島の可能性』は、唯物論的な仕方での死の否定を試み、その失敗を描く小説である。しかし、その失敗が最終的に明らかにすることは、死を愛の障害としていた唯物論的世界観は絶対的なものではないということである。つまり、唯物論的な抵抗の試みの失敗によって生み出されるのは、なすすべがもはやないという悲観主義ではなく、精神的すなわち非物質的な変化によって唯物論的世界観そのものから抜け出すことの可能性であり、それによって生まれる愛の可能性である。

結び

ここまで、『素粒子』から『ある島の可能性』までのウエルベックの長編小説三作に描かれた唯物論的世界観への抵抗とその失敗について論じてきた。ウエルベックの小説において、唯物論的世界観が抵抗すべきものとなるのは、その世界観によって一個人の生の絶対的な終わりを意味するようになった死が愛にとって障害となるからである。なぜなら、そのような死は個人主義を生み出し人々を分離させることに加え、愛する人の死をその人との永遠の別れにしてしまうからである。このような分離を引き起こす死に対する抵抗の試みとその失敗が、『素粒子』から『ある島の可能性』まで、一連の流れをなすように描かれている。まず『素粒子』においてはポストヒューマニズム的な科学主義、つまりクローン技術によって新種の不死の存在を生み出すという試みが描かれるが、それは人類の滅亡を代償として行われるものであり、ゆえに人類にとっては失敗に終わっている。次に『プラットフォーム』においては性的なものによって人間のまま死を否定することが試みられるが、最終的にその力の不十分さが示され失敗に終わっている。最後に『ある島の可能性』においては、『素粒子』とは異なり、人間との連続性を保った不死のクローンによって死を否定することが試みられるが、その結果として生み出されたネオ・ヒューマンたちは、未来において個人主義的な互いに隔絶した生を送っており、この試みもまた失敗に終わっている。しかし、『ある島の可能性』におけるこの失敗は、それまでのウエルベックの小説で前提とされてきた、あらゆるものを物質的存在に還元する唯物論的世界観が絶対的なものではなく、人間、そしてその延長線上にいるネオ・ヒューマンの存在様式が物質的条件によってのみ決まるわけではないということを示してもいる。それによって出現するのは、精神的変動によって唯物論的世界観そのものから離脱するという試みの可能性である。ゆえに、唯物論的世界観の内部で死を否定する試みの果てで、『ある島の可能性』におけるダニエル 25 の離脱は次の

comprenais que la nostalgie de ce sentiment ait pu précipiter Marie²³ sur les routes, si loin de là, sur l'autre rive de l'Atlantique. J'étais à vrai dire moi-même entraîné sur un chemin tout aussi hypothétique » PI 793/488-489. 強調原文。

ような結論を示していると言えるだろう。すなわち、変異は遺伝子的なものではなく、精神的なものとなるだろう。

以上のようにウエルベックの小説における唯物論的世界観への抵抗とその失敗の変遷をたどると、『ある島の可能性』と『地図と領土』のあいだに見られる変化の理由について次のような仮説を立てることができる。すなわち、『地図と領土』以降において不死に対する関心が低下するのは、唯物論的世界観の枠内で死に抵抗するのではなく、『ある島の可能性』において新たな可能性として示された、精神的変動によって死を愛の障害としている唯物論的世界観自体への抵抗を試みるという方向へとウエルベックが転換したからである。つまり、『ある島の可能性』以前と『地図と領土』以後のあいだに見出すべきは断絶ではなく、連続性であり、『ある島の可能性』までにおいて描かれた抵抗の試みの失敗は、悲観主義を強化するものではなく、新しい可能性への扉を開けるものなのである。この仮説の検討を今後の課題として、本論を閉じたい。

参考文献

ウエルベック、ミシェル『素粒子』野崎歓訳、筑摩書房、2006年。

—、『プラットフォーム』中村佳子訳、河出書房新社、2015年。

—、『ある島の可能性』中村佳子訳、河出書房新社、2016年。

—、『地図と領土』野崎歓訳、筑摩書房、2015年。

BAGGESGAARD, Mads Anders, «Le corps en vue — trois images du corps chez Michel Houellebecq», in Sabine van Wesemael, Murielle Lucie Clément (dir.), *Michel Houellebecq sous la loupe*, Amsterdam/New York, Rodopi, 2007, pp. 241-252.

BELLANGER, Aurélien, *Houellebecq, écrivain romantique*, Paris, Editions Léo Scheer, 2010.

BETTY, Louis, *Without God: Michel Houellebecq and Materialist Horror*, Pennsylvania, Penn State University Press, 2016.

CLÉMENT, Murielle Lucie, *Michel Houellebecq revisité : l'écriture houellebecquienne*, Paris, L'Harmattan, 2007.

ELLIS, Susannah, «Communautés (im)mortelles? : La politique posthumaine à l'œuvre dans les textes de Michel Houellebecq», in Hélène Machinal, Elaine Després (dir.), *PostHumains : Frontières, évolutions, hybridités*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2019, pp. 137-152.

FERRANDO, Francesca, «Posthumanism, Transhumanism, Antihumanism, Metahumanism, and New Materialisms: Differences and Relations», *Existenz, An International Journal in Philosophy, Religion, Politics, and the Arts*, Vol. 8, no. 2, 2013, pp. 26-32.

GUTHKE, Karl S., *Life without End: A Thought Experiment in Literature from Swift to Houellebecq*, New York, Camden house, 2017.

HOUELLEBECQ, Michel, *Houellebecq 1991-2000*, Paris, Flammarion, 2015.

—, *Houellebecq 2001-2010*, Paris, Flammarion, 2016.

- MORARU, Christian, « The Genomic Imperative: Michel Houellebecq's *The Possibility of an Island* », *Utopian Studies*, Vol. 19, no. 2, Penn State University Press, 2008, pp. 265-283.
- REMY, Maud Granger, « Le tourisme est un posthumanisme Autour de *Plateforme* », in Sabine van Wesemael, Murielle Lucie Clément (dir.), *Michel Houellebecq sous la loupe*, Amsterdam/New York, Rodopi, 2007, pp. 277-286.
- SCHUEREWEGEN, Franc, « He Ejaculated (Houellebecq) », *L'Esprit Créateur*, Vol. 44, n° 3, 2004, pp. 40-47.
- SREENAN, Niall, « Universal, acid: Houellebecq's clones and the evolution of humanity », *Modern & Contemporary France*, Vol. 27, no. 1, 2018, pp. 77-93.
- VARROD, Pierre, « Michel Houellebecq : *Plateforme* pour l'échange des misères mondiales », *Esprit*, Vol. 279, n° 11, 2001, pp. 96-117.
- VELLA, David, « The Houellebecq Cure: All Malady Will End in the Neohuman », *Word and Text — A Journal of Literary Studies and Linguistics*, Vol. 4, no. 1, 2014, pp. 139-157.
- WESEMAEL, Sabine van, « L'ère du vide », *RiLUnE*, vol. 1, 2005, pp. 85-97.
- , « Sérotonine de Michel Houellebecq : prédiction du destin tragique de la civilisation occidentale », *RELIEF - Revue électronique de littérature française*, vol. 13, n° 1, juillet 2019, pp. 54-66.

* 本論文は、京都大学大学院文学研究科に提出した 2022 年度修士論文 *La mort comme obstacle à l'amour dans les romans de Michel Houellebecq* の一部を日本語に訳し加筆修正を加えたものである。